

智顗における十善の受容

——維摩經疏と三大部の比較を中心に——

大 津 健 一

1. はじめに

智顗（538–597）における十善の位置づけを、佐藤 1961 の区分に従って検討すると、前期（『次第禪門』など）においては戒と見なさないが、後期は五戒と並ぶ在家戒とし、後期の中でも維摩經疏と三大部に差異がある（大津 2018）。後期における差異を考察するには、親撰に準ずる維摩經疏に対して再三に修治された三大部（佐藤 1961, 448）という成立事情に鑑みて、現行本以前の三大部の検討が求められる。本論では、佐藤 1961 が『摩訶止観』の原初形態と見なした、灌頂（561–632）と宝地房証真（生没年不詳）所引の『止観』の内容を中心に検討したい。

2. 維摩經疏と三大部（現行本）における特徴

『維摩經文疏』と『摩訶止観』『法華玄義』には十善に関して次の特徴がある。
『維摩經文疏』

○世間（凡夫）と四教の五段で經を解釈し、世間に十善を配する（X18, 510a10–15）。

○十善を『大智度論』由来の十種戒の枠に入らない低位に置く（X18, 523c16–22）。

『摩訶止観』

○性戒を『大智度論』の十種戒の根本とし、性戒に十善を当てる（T46, 36a14–20）。

○性戒を戒波羅蜜の根本・解脫の初因とする（T46, 36b13–14）。

○十種戒の第一の不欠戒を性戒から四重禁まで持つこととする（T46, 36b24–25）。

『法華玄義』

○『涅槃經』の根本業清浄戒を十善性戒とし、諸戒の根本とする（T33, 716c28–29）。

概して、三大部において性戒の思想が現れて十善と関連づけられたことが、十善を低位に置く『維摩經文疏』との差異に結びついたと考えられる。

3. 『摩訶止観』の諸本

佐藤 1961 は『摩訶止観』について、「聴記本」（594年の講説を灌頂が筆録）、「整理本」（聴記本をもとに灌頂が智顗に提出。597年までの成立）、「修治本」（智顗没後に灌頂が加筆。605年より前か後の成立）、「再治本」（607年から632年の成立。現行本）を経たとする。湛然（711-782）の『止観輔行伝弘決』は『止観』に第一本・第二本・第三本があるとし、前二本は『円頓止観』の名である（現存せず）。佐藤は第一本を整理本、第二本を修治本、第三本を再治本に対応させる（佐藤 1961, 400）。

一方、証真の『法華三大部私記』は『円頓止観』を引くが、上記三本と異なる別本である。また灌頂の『観心論疏』は『止観』を依用するが現行本と異なる所がある。これらは現行本に対して素朴な内容を持ち、「止観の原初形態」（佐藤 1961, 399）とされる。この『円頓止観』は円琳（1190-?）の『菩薩戒義疏鈔』、鎌倉末期の作という『摩訶止観伊賀抄』にも引かれる（山口 1994, 大久保 1991）。これらを検討することで『摩訶止観』の所説がどの段階で存在したか推定できよう。

4. 『円頓止観』

証真が引く『円頓止観』に、智顗が用いる『大智度論』の十種戒の内容がある。

圓頓云、不破戒、不欠戒、不穿、不雜、篇聚宛然……〔已上略抄〕。（『止観私記』巻第二末、仏全22, 860b2-6）

『摩訶止観』は十種戒の第一を不欠戒、第二を不破戒とし（T46, 36a15-16）、不欠戒は性戒から四重禁までを持つこととするが（T46, 36b24-25）、この『円頓止観』は不破戒と不欠戒が逆で、前四戒は五篇・七聚（具足戒）であり、性戒に触れない。円琳と『摩訶止観伊賀抄』が引く『円頓止観』には次の説明がある。

円頓云、四重清浄、名不破戒。（『菩薩戒義疏鈔』巻上ノ上、仏全71, 14a6）

円頓止観云、欠者は十三罪。（『摩訶止観伊賀抄』巻四、『続天台宗全書 顯教1』p. 487a16）

不破戒と不欠戒には五篇・七聚の四重禁と十三僧残を当て、性戒を含んでおらず、原初形態とされる『円頓止観』と『摩訶止観』は明らかに異なるのである。

5. 証真所引の第二本

第二本云、身三口四更加浄命。（『止観私記』巻第四、仏全22, 922b5-6）

証真は『法華三大部私記』において第二本を引用し、この文は『大智度論』を引く『摩訶止観』（T46, 36a17-19）を踏まえている。『摩訶止観』はこの内容において十種戒と性戒を結びつけるので、第二本は性戒を論じている可能性が高い。

問。若持性戒名不欠者、違第二本及玄文第四持性戒名不破。

答。十戒次第、玄與今文有不同也。（『止観私記』巻第四、仏全22, 932a1-3）

この文では、性戒を不欠戒に含めた『摩訶止観』が第二本や『法華玄義』に異なると、問いで指摘する。だが答えは第二本の内容に言及しないため、性戒を論じているであろう第二本ではあるが、十種戒に含めるかどうかは不明である。

6. 『観心論疏』の『止観』

灌頂の『観心論疏』は智顗の『観心論』への注釈で、『止観』を多く踏襲する。二十五方便（「具五縁」「呵五欲」「棄五蓋」「調五事」「行五法」）についても、特に具五縁から棄五蓋において『観心論疏』は現行『摩訶止観』とほぼ一致する。本論の主題に関する具五縁「持戒清浄」の一部を対照させると次の通りである。

『観心論疏』（T46, 604a8-b2）

一持戒者、經論出処甚多。且依釈論有十種戒。謂不欠、不破、不穿、不雜、隨道、無著、智所讚、自在、隨定、具足。此十通用性戒為根本。大論云、性戒者、是尸羅、身口等八種。謂身三口四更加不飲酒、是淨命防意地。又云、十善是尸羅。仏不出世、世常有之、故名旧戒。……

持此十種戒、攝一切戒。不欠戒者、即是持於性戒乃至四重、清淨守護如愛明珠。……不破者、即是持於十三、無有破損……

『摩訶止観』（T46, 36a13-b29）

此中明持戒清浄……列名者、經論出処甚多。且依釈論有十種戒。所謂不欠、不破、不穿、不雜、隨道、無著、智所讚、自在、隨定、具足。此十通用性戒為根本。大論云、性戒者、是尸羅、身口等八種。謂身三口四更加不飲酒、是淨命防意地。又云、十善是尸羅。仏不出世、世常有之、故名旧戒。……

二明持者、此十種戒攝一切戒。不欠戒者、即是持於性戒乃至四重、清淨守護如愛明珠。……不破者、即是持於十三、無有破損……

『観心論疏』依用の『止観』が原初形態ならば、諸戒の根本である性戒に十善を当て、十種戒に性戒を含める上記の内容は、智顗の講説のままということになる。だが『摩訶止観』とほぼ一致する具五縁から棄五蓋に関しては、原初形態とする説に以下の問題点を指摘できる（紙幅の関係で詳細な考察は稿を改めたい）。

(1) 『円頓止観』との相違 佐藤は『観心論疏』の『止観』と証真所引の『円頓止観』が共に原初形態であると考えたが、既述の通り『円頓止観』は十種戒に性戒を含めないが『観心論疏』は含めるなど、原初形態とされる二つは相違する。

(2) 成立時期 『観心論疏』の成立は603年から605年ごろと推定される（佐藤 1981, 377）。一方、『摩訶止観』の修治本の成立は605年の前か後を想定する（佐藤 1961, 400）。『観心論疏』は修治本（第二本）を参照した可能性もありえよう。

(3) 私記部分の存在 『観心論疏』（T46, 606a13–14）と『摩訶止観』（T46, 43c16）の訶（呵）五欲の文に「今私対之」とあり、五欲と六塵・六根の関係を補足説明する。『摩訶止観』で「私」を付して解釈する場合、灌頂の私記部分とされ、該当箇所も湛然は灌頂のものと指摘する（『摩訶止観科文』巻第二, X27, 872a29）。それに基づけば、智顗の講説である聴記本ではありえず、智顗に提出した整理本でも不自然であり、修治本（第二本）以降のものを『観心論疏』が依用したと考え得る。

(4) 第二本との相違 『摩訶止観』が第二本と異なることは、先述の通りであり、『摩訶止観』と同内容の『観心論疏』も第二本と異なることになる。

以上から『観心論疏』の戒に関する内容は、原初形態ではなく、第二本とも異なり、修治本（第二本）以後の現行本に近いものを参照した可能性もあろう。

7. むすび

維摩経疏と三大部における十善および性戒の解釈の差異に関して、原初形態とされる『円頓止観』の引用は十善や性戒への言及がなく、『摩訶止観』とは異なる。一方、『観心論疏』依用の『止観』は、性戒を諸戒の根本とし、十善を性戒に当て、十種戒に性戒を含める点で『摩訶止観』と一致し、修治本や現行本に近いものを参照した可能性もあり、『摩訶止観』の十善や性戒の内容は智顗講説当初のものとは言い難いであろう。一方、維摩経疏の十善に関する位置づけは、原初形態とされる『円頓止観』と矛盾しない。修治本以降に性戒が論じられていることから、三大部特有の性戒と十善の位置づけは灌頂の修治による可能性が考えられよう。

〈参考文献〉

大久保良順1991「摩訶止観伊賀抄下 解題」天台宗典編纂所編『続天台宗全書 顕教2』春秋社。
 大津健一2018「智顗の戒律思想——十善を中心として——」『創価大学大学院紀要』40（近刊予定）。
 佐藤哲英1961『天台大師の研究』百華苑。
 佐藤哲英1981『続天台大師の研究』百華苑。
 山口興順1994「円琳撰『菩薩戒義疏鈔』所引『円頓止観』について」『天台学報』36: 134–138。

〈キーワード〉 智顗, 十善, 性戒, 維摩経疏, 『摩訶止観』, 『円頓止観』, 『観心論疏』

（創価大学大学院）